

第55回中学生作文コンクール

都道府県別賞一等

未来へつなぐバトン

広島県 広島市立楠那中学校 三学年

託見 光太郎

先日、テレビのニュースで平成二十八年の日本人の平均寿命は男性が八十・九八歳、女性が八十七・一四歳で、ともに過去最高を更新したと報じていた。世界第二位である。

父が振り向いて僕に言った。

「日本人も長生きになったな、でもな、健康で長生きしないといけないよ。寝たきりや病気で長く入院していると自分も家族も大変だ。」

僕は幼くて覚えていないが、父は命にかかわる大病を患い入院して手術を受けたと聞いていた。幸い今は再発もなく元気に暮らしているのもとても安心している。

「お父さんは生命保険に入っているんだよね。」

「もちろん入っているよ、家族のためにみんなが困ることがないようにね。」

その時の入院費や治療費は大分まかなえて、とても助かったと母が言っていた。

父は、六十歳を過ぎて決して若いとは言えないが、家族のために一生懸命働いて、もしものために備えて保険を掛け続けている。今、僕が当たり前に毎日を安心して暮らせるのは父と母がいて支えてくれるお陰だと、改めて感じた。

「人間は、残念だけどいつか死が来るんだよ。命には限りがあるものだ。」

と父は少し淋しそうな顔で言った。

「だから光太郎も元気に悔いのないように生きるんだぞ。」

その言葉は重く、「命」は必ず終わりが来るのだと改めて胸に突き刺さった。

「命」と言えば、広島ではもうすぐ七十二回目の原爆の日を迎える。青白い閃光とともに上空には巨大なキノコ雲が上がった。たくさん尊い命が一瞬にして奪われた。家族や大切な人を失い、悲しみを乗り越えて残された人々が今の平和な広島をつくった。だからこそ自分に与えられた大切な「命」を考えて生きていこうと思う。

一八六八年に福沢諭吉が制度を紹介したが、日本での生命保険

第55回中学生作文コンクール

の始まりである。「人の生死によって金儲けをするのか」という誤解に基づく批判も多かったようで、普及するまでには時間がかかったようだ。しかし今では九割近くの加入者がいるそうだ。

「生命保険は、もしも自分がいなくなっても家族への未来へつなぐバトンなんだよ。」

と父は言った。それは、僕と兄へのメッセージだと思った。託見家を代々続けていくために、兄弟二人が力を合わせて歩んでいって欲しいという父の願いでもあった。『生命に値段はつけられない』と思うが、保険は未来を照らす光である。

生まれて十四年間、何不自由なく育ってきた。両親の愛情や周りの人々に助けられてここまで成長してきたことに感謝したい。将来自分は何の仕事をしていくかまだ決まっていらないが、いつの日か結婚して子供ができ、家族とともに楽しく生活をしていきたい、と夢は広がってゆく。その家族を守り豊かな人生を歩むため、生命保険を考える時がやってくるだろう。そのためにも立派な大人に成長して、父からの言葉である「未来へつなぐバトン」を準備したいと思う。